記念講演

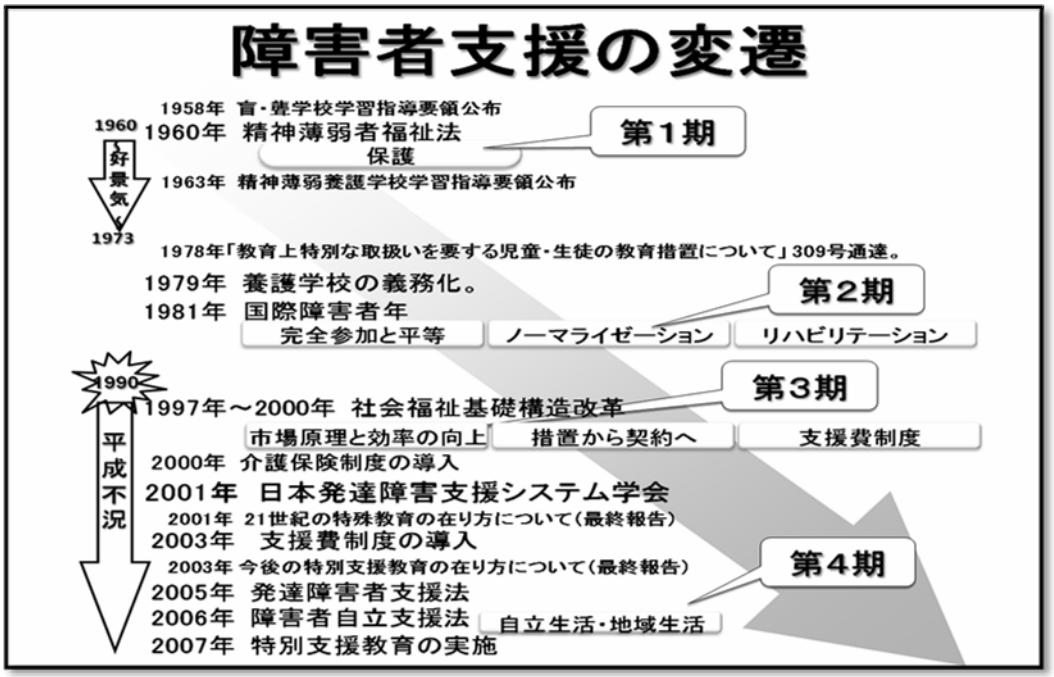
【１２：３０～１３：２０】

『今、あらためて障害者支援を考える　－生涯発達支援・地域生活支援をめざして－』

講師：菅野　敦　（東京学芸大学教育実践研究支援センター　教授）

日本発達障害支援システム学会は、2001 年 4 月、発達障害に関する様々な課題について社会がめざすべきシステムとして生涯発達支援と地域生活支援という観点から幅広く考え、支援システムの構築の過程で得られた情報の発信と交換をめざして発達障害の支援や研究に関わる実践者・研究者に呼びかけて、結成しました。発達障害ということばは、元来、知的発達障害を含むより広い概念です。本学会では開会以来、この考えに立っています。2005 年 4 月に我が国では発達障害者支援法が施行されました。また、2007 年には特別支援教育が始まりました。そこでの「発達障害」の定義は、本学会のものとは異なりかなり狭められたものとなりました。しかし、本学会では発達障害を発達期に起こった様々な障害によって生じた発達の遅れ・偏りであり、その支援は社会システムの構築という枠組みにそって行われなくてはならないという立場を続けてとってきました。

本学会の 10 周年に際し、あらためて我が国における障害者支援の変遷をたどってみることにします（下図）。すると、歴史的に障害者支援にもいくつかのポイントとなる施策の施行と実施がみられることがわかります。現在、障害者支援は、その歴史において第４期目に入っていると考えられます。



私たちは発達障害者に対して、この第４期目において何をどのように支援するのかを求めて、ICF 等を参考にして「生涯発達と地域生活支援の４領域」を提案してきました。具体的には、自立生活（くらす）支援、作業・就労（はたらく）支援、学習・余暇（まなぶ・たのしむ）支援、そして、コミュニケーション（かかわる）支援領域です。10 年間研究大会における分科会は、この４領域をベースに行ってきました。さらに、この支援領域にそってアセスメントの開発や教育・指導プログラムの開発にも取り組んできました。ただ、地域や現場にある様々な課題を教育や福祉という社会的なシステムの視点から考え、解決していくためにはまだ多くの課題が残されていることをあらためて今日、確認したいと思います。

ワークショップ

【１３：３０～１４：５０】

アセスメント法の個別指導計画への活用
ーLC スケール（言語･コミュニケーション発達スケール）を用いてー

東京学芸大学教育実践研究支援センター
大伴　潔

１．言語・コミュニケーション評価の観点

ことばの発達とは、単に語彙の種類や豊富さで評価できるものではない。表現する語彙を持たない乳児期の段階（前言語期）もあれば、ことばを獲得した段階（言語期）に入ってからも、１語文から、2－3 語の「語連鎖」による表現が可能な段階への進展がある。また、格助詞の使用など「統語」（文法）のスキルや、これらを駆使して複数の文で表現したり、論理的な推論を展開したり、文章を理解したりするといった「談話・語操作」能力、文字習得の前提となる「音韻意識」が育っていく。また、表現の手段をもっていても、場面に応じて適切にふるまえるかといった「コミュニケーション」の側面も重要である。したがって、発達段階に応じて多面的な課題設定をする必要性がある。

２．ＬＣスケールとは

ＬＣスケールは、語彙、語連鎖、談話・語操作、音韻意識といった言語領域を言語表出、言語理解の観点から幅広く捉えるとともに、コミュニケーションにかかわる課題も設定し、子どもの言語・コミュニケーション能力を総合的に評価する。また、口頭で答える「言語表出」と、絵の指さしなどで答える「言語理解」、さらに、ことばの使用の基礎となる「コミュニケーション」の３つの側面を評価する（図１）。

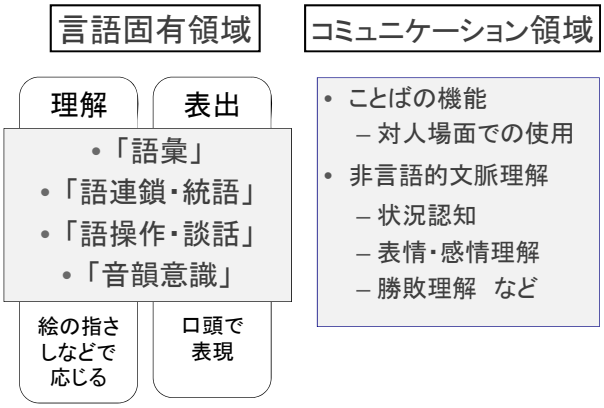


図１．ＬＣスケールを構成する主な課題の領域

対象とする発達段階として、前言語期である「ことば芽生え期」、一語文を中心とする「一語文期」、語連鎖が出現する「語連鎖移行期」、ことばによる情報伝達の幅が広がる「語操作期」、学齢期の言語レベルの橋渡しとなる「発展期」の５段階を設定している。対象年齢は特に限定されていないが、言語発達段階が典型発達に照らして 6 歳レベルまでであれば適用できる。

３．ＬＣスケール実施にあたっての留意点

本スケールは 64 の課題で構成されているが、すべての課題を実施する訳ではない。はじめに「手ごたえ課題」のみを実施し、大まかな発達水準を見極めたうえで、適切な課題の範囲を施行する。手ごたえ課題Ａが通過したらＢを実施し、手ごたえ課題Ｂが通過したらＣとＤの両方を実施する。最後に通過した手ごたえ課題がどれであるかによって、前述の「一語文期」「語連鎖移行期」「語操作期」「発展期」のいずれかの範囲を実施する。

４．結果のまとめ方

記録用紙の表紙にスコアをまとめ、合計点から「ＬＣ年齢」をマニュアル巻末の表から求める。対象児の生活年齢が 0 歳～6 歳 11 カ月の場合、合計点から「ＬＣ指数」をマニュアルから求める。生活年齢が 7 歳以上の場合、別の公式を使って算出することができるが、概ね中学生以上の生活年齢の場合、ＬＣ指数は出さなくても構わない

ＬＣ年齢やＬＣ指数として示される発達水準は、ＬＣスケールから得られる情報の一部に過ぎない。「領域別まとめシート」を用いて詳細なプロフィールを明らかにすることが望ましい。これが『課題分析』と呼ぶ作業である。

５．ＬＣスケールの結果の活用の仕方

ＬＣスケールの結果を日常の教育・臨床活動に反映させるにはいくつかの方法がある。

Ａ. 対象児の言語表出･言語理解のレベルに合わせて、子どもにとって分かりやすく、モデルになりうる発話を添えるなど、子どもに適した言語的関わり方を探り、おとなの働きかけの複雑さを調節する。（環境調整）

Ｂ. 課題分析で特に落ち込みのある部分を明らかにし、授業・臨床活動での目標とする。（不通過であった項目の内容をそのまま指導目標にすることは適切ではない。課題そのものを指導に用いないように留意する。）

Ｃ．課題分析で困難が明らかになった課題について「短期目標例」を用いて指導目標に反映させる。

支援にあたっては、設定した目標に向けて、環境を調整し、教材を工夫し、高頻度で経験する機会を提供する。ただし、対象児・生徒の認知特性などにも配慮が求められる。例えば、形容詞を習得するには、その意味を理解する認知発達の土台が必要となる。

設定した目標は「暗記」や「機械的な繰り返し」で到達するものではない。日常生活に役立つことばの使い方（機能的な使用）ができなければ、真のことばの力にはならない。理解・表現力が人とのかかわりの中でいかに活かせるかかがポイントになる。

指導の成果が、例えば１年後の再検査でスコアの上昇として現れるとは限らない。日常の課題の遂行レベルやコミュニケーションの観察を通して、指導の成果を確認していただきたい。

（参考文献）
大伴 潔・林安紀子・橋本創一・菅野 敦 編著 (2008) 言語･コミュニケーション発達の理解と支援プログラム LC スケールによる評価から支援へ．学苑社.